

体育系大学のダンス授業における技能評価力を高める授業実践の効果

— リズム系ダンスの「技能評価観点構造図」を手がかりとして —

鹿屋体育大学 梶 ちか子

東海学園大学 松 元 隆 秀

鹿屋体育大学 金 高 宏 文

要 旨

教員養成を担う体育系大学の授業では、ダンスの実践的指導力を高めるための様々な取組が行われている。しかし、その取組の多くは、示範などに必要な「ダンス技能」の習得に対応したものである。指導の際に必要なダンスの「技能評価力」の育成に関しては課題が残されている。そこで我々は、ダンス専門家及び現職教員が有する技能評価観点を聴取・整理し、「技能評価観点構造図」としてまとめた。本研究では、「技能評価観点構造図」を手がかりに、体育系大学のダンス授業においてダンスの技能評価力を高める授業を実践し、その効果を検証することを目的とした。

対象は体育系大学のダンス実技授業受講生47名であった。各授業内で「技能評価観点構造図」を用いた授業を実践した。授業前後に、リズム系ダンスの映像を鑑賞し、学生にそれぞれの映像の動きについて評価させ、「評価の理由」と「ダンスを良くするためのアドバイス」を記述式で回答させた。記述内容についてKH Coder 2（樋口，2004）を用いて、「ロックのリズムのダンス」「ヒップホップのリズムのダンス」別に、それぞれの3映像の全受講生の記述における総抽出語数、抽出語の種類数を算出した。さらに、「技能評価観点構造図」の評価観点に関連する用語について、評価観点別に用語数をカウントした。

その結果、ダンス実技の授業後に、「ロックのリズムのダンス」「ヒップホップのリズムのダンス」共に、記述抽出語数及び抽出語種類が増加した。また、授業後に「技能評価観点構造図」に示された評価観点に関する記述が増加し、「技能評価観点構造図」を活用した授業は、動きを観る観点をより具体化し、技能評価力を向上させることが示唆された。

以上の結果より、「技能評価観点構造図」を活用することで、技能評価の際の技能評価観点が増加し、技能評価の理解度が向上した可能性が示唆された。

Effects of class practice to enhance skill evaluation ability in dance classes of physical education universities

— “Rhythm dance performance concept diagram” as a clue —

Chikako KAKOI

National Institute of Fitness and Sports in KANOYA

Takahide MATSUMOTO

Tokaigakuen University

Hirofumi KINTAKA

National Institute of Fitness and Sports in KANOYA

Abstract

Various lessons are being held at the physical education university in the teacher training course to raise practical leadership skills of dance. However, many of the classes correspond to acquisition of “dance skills” necessary for indicators. Challenges remain with regard to the development of “skill evaluation ability” of dance necessary for guidance. Therefore, after hearing and organizing the skill evaluation viewpoints of dance experts and incumbent teachers, we summarized it as a “dance performance concept diagram” (Hereafter, DP concept diagram). In this research, with the clue of “DP concept diagram”, the objective was to practice a lesson that enhances the skill evaluation ability of dance in the dance class at the physical education university and to verify its effect.

The subjects were 47 students of the dance practical lessons from the Physical Education University. In each lesson I practiced lessons using “DP concept diagram”. Before and after the lesson, we watched images of rhythm dance, evaluated students about the movement of each image, and let me answer “reason for evaluation” and “advice for improving dance” by description formulas. About the description contents With the use of KH Coder 2 (Higuchi, 2004), total extraction in the description of all the students of each of the three videos by “Rock Rhythm Dance” and “Hip Hop Rhythm Dance”. The number of words, and the number of types of extracted words. In addition, for terms related to the evaluation viewpoint of the DP conceptual diagram, the number of terms was counted by evaluation viewpoint.

As a result, after the class of dance practice, the number of extracted terms and extracted words increased in all rhythm dance. In addition, the description on the evaluation viewpoint shown in the “DP conceptual diagram” increases after the lesson, and the lesson using the “DP conceptual diagram” can realize the viewpoint of movement more and improve skill evaluation ability it was suggested.

From the above results, by utilizing the “DP conceptual diagram”, the skill evaluation viewpoint at the time of skill evaluation increased.

キーワード：技能評価観点，大学ダンス授業，リズム系ダンス

1. 緒言

日本の学校体育におけるダンス教育は、平成元年の学習指導要領の改訂（文部省，1989a，1989b）において、中学校と高等学校で男女共修となり、平成10年の改訂では、「表現・創作ダンス」「フォークダンス」に加え、新たに「リズムダンス」（小学校）、「現代的なリズムのダンス」（中学校・高等学校）が加わった（文部省，1999a，1999b，1999c）。さらに平成20年3月告示の学習指導要領（文部科学省，2008）では、それまで選択とされていた「武道」「ダンス」領域も含め、全領域が男女とも必修となった。この改訂では、表現運動系・ダンスの指導内容が児童・生徒の発育・発達段階に応じて具体的に示された。しかし、ダンス領域の指導においては、教師側のダンス経験や指導経験、知識不足などが指摘されている（中村，2009；松本・寺田，2013）。そのため、教員養成を担う大学において、ダンス授業が担う役割は非常に大きく、その実践内容について検討する必要性は高い。

文部科学省（2015）は、教員は採用当初から大きな支障が生じることなく指導実践できるようにすること

が必要であり、教員として最小限必要な資質能力を学生に身に付けさせることが重要であると、教員養成課程の役割を示している。教員養成系の大学におけるダンス授業に関しては、大学時に1年以上のダンス履修経験を有することが学校現場での指導実践に有効であるとの報告（松本ほか，1994）がある。また、筆者の研究においても、大学でダンス授業を受講していない現職教員は、「運動技能・表現技法等的確な助言ができない」と感じている割合が高かった（梶・小松，2015）。

現在、教員養成を担う大学の授業では、ダンスの実践的指導力¹⁾を高めるための様々な取り組みが行われている。例えば木山（2014）は、学生による授業評価を基にした授業改善の課題を検討し、その結果によると、学習者としての学生に対する学習効果はおおむね実現できたが、指導者としての学習効果に対しては把握しきれず、指導する立場を意識させたいうでの学習場面の確保が課題であると指摘されている。また、宮本・中村（2015）は、学生自身の踊る・作る力をつけると同時にダンス指導者として必要な指導力を高め

る実習や理論を組み込んだダンス指導法授業を実施した結果、ダンスの重要性に対する認識が高まり、指導への自信も高まったと報告している。太田 (2017) は、ダンスの技能・知識の習得とアクティブ・ラーニングの実践を考慮した学習指導過程を計画・実施した結果、授業中盤に「踊る」「創る」「指導する」自信は、授業受講前と比較して全て有意に向上していたと報告している。しかし、「指導する」自信は、「踊る」「創る」自信よりも低値を示し、単元後半からはより指導する視点を強調しながら授業を展開する必要があると述べている。宮本 (2018) は、小グループによる指導法実習を毎時間組み込んだ単元構成の「ダンス指導法授業」を行った結果、ダンスを指導する力についての自信を高めることができたことと報告している。しかしながら、実施された授業は、学生自身の踊る力を高めるための「ダンス実技」を必修で1年間受講した後に行われた授業であったことから、他大学においてダンス実技を体験しない場合の指導法の授業で活用するには課題が多い。また、学生の意識の変容は確認されたが、実際に受講生の指導力の向上を示す客観的な評価指標は設けられていなかったことから、指導力がどの程度向上したかについては不明である。

これらの事例から、教員養成を担う大学のダンス授業においては、示範等に必要「ダンス技能」の習得に対しての成果は認められる一方、ダンスの指導力の育成には課題が残されている。特に指導の際に必要なダンスを評価する「技能評価力」について、大学のダンス授業の中で習得を目指すことは重要であると考えられる。

そこで筆者は、技能評価力向上の一助としてICTを活用したダンスの映像視聴・評価活動を含む授業実践を行った(梶ほか, 2018)。授業では、タブレット端末(iPad)を用いて動きを撮影し、撮影された映像を視聴しながら自分や仲間の動きについて省察を行った。その結果、運動技能の改善や技能評価の理解に有効であることが示唆された。しかしながら、学生自身が実際にダンスを指導する際には、より良い動きに改善させるため、動きの詳細な評価の観点をとらえた指摘を児童や生徒に行う必要があり、このような発展的な技能評価力の獲得については課題が残された。

以上のような背景から、筆者らは表現系ダンス・リズム系ダンスにおけるダンス技能を評価する規準を明らかにするために、ダンス専門家及び現職教員が有する技能評価観点を聴取・整理し、「技能評価観点構造図」としてまとめた(梶ほか, 2019)。「技能評価観点

構造図」は、表現系ダンス・リズム系ダンスにおける技能評価観点のキーワードごとの関係性に着目して構造的に整理したもので、現職教員からも一定の評価が得られている。しかし、技能評価観点構造図が体育系大学におけるダンスの実技授業科目における受講生の「技能評価力」の向上にどれほど寄与できるかについては明らかにできていない。

そこで本研究では、体育系大学のダンスに関わる授業科目においてリズム系ダンスの「技能評価観点構造図」を手がかりとした技能評価力を高める授業を実践し、その効果について明らかにすることを目的とした²⁾。

2. 方法

2-1. 対象授業及び調査対象者

「技能評価観点構造図」を手がかりとしたダンスの技能評価力を高める授業は、体育系大学の2017年度前期に開講されたダンスの実技科目(「ダンス①」「ダンス③」、以下「ダンス実技」とした。ダンス実技の受講生は47名(3年生:37名, 4年生:10名)であった。受講生はダンスを専門種目としない学生であった。

2-2. ダンス実技の授業概要(図1)

ダンス実技は、基礎的な実技力を身に付けるための関連実践科目の中の選択科目に位置付けられ、3年次以降の学生が授業選択に関するオリエンテーションを受講後に選択履修する。

1時間目は、オリエンテーションとして、授業のねらいや進め方、評価等について説明した後、様々な校種のダンス関連授業の中で創作されたダンス作品の映像を鑑賞した³⁾。2時間目には、どのような指導内容のダンス授業でも使えるウォーミングアップや交流ダンスの実践を行った。3時間目から5時間目まで3時間をかけて「現代的なリズムのダンス」の「ロックのリズム」と「ヒップホップのリズム」のダンスを実施した。また、4時間目と5時間目の授業時には、タブレット端末(iPad)のカメラ機能を用いて動きを撮影し、撮影された映像を視聴しながら自身や仲間の動きについて省察を行った(図2)。

授業者は、筆者(体育系大学で舞踊教育・体育科教育研究に8年従事)と大学院生(学部生時代にダンス部に所属・全国大会入賞、体育系大学でダンス実技授業のTAとして3年半従事。高齢者の身体活動、舞踊教育研究に5年従事。博士後期課程3年)であった。

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16
オリエンテーション・ダンス鑑賞	ダンス理論														発表会（試験） まとめ
	ウオダンスのグ 交流 ダンス	現代的なリズムの ダンス 導入 リズム	ロックのリズムのダンス	ヒップホップの リズムのダンス まとめ	外国の フォークダンス 日本の民謡	身近な生活や日常動作 （創作ダンス①）	（多様な感じ ） 創作ダンス② 対極の動きの連続 （	（もの・道具を使って ） 創作ダンス③	（群（集団）の動き ） 創作ダンス④ まとめ	現代的なリズムのダンス フォークダンス 作品・創作練習		創作ダンス 作品・創作練習		発表会リハール	
映像視聴・ 評価活動			●	●		●	●	●	●						
技能評価観点 構造図 提示		● リズム系	● リズム系	● リズム系		● 表現系	● 表現系	● 表現系	● 表現系	● リズム系 表現系	● リズム系 表現系	● リズム系 表現系	● リズム系 表現系		
技能評価 調査		● リズム系		● リズム系		● 表現系			● 表現系						

図1 単元計画と調査項目との関係

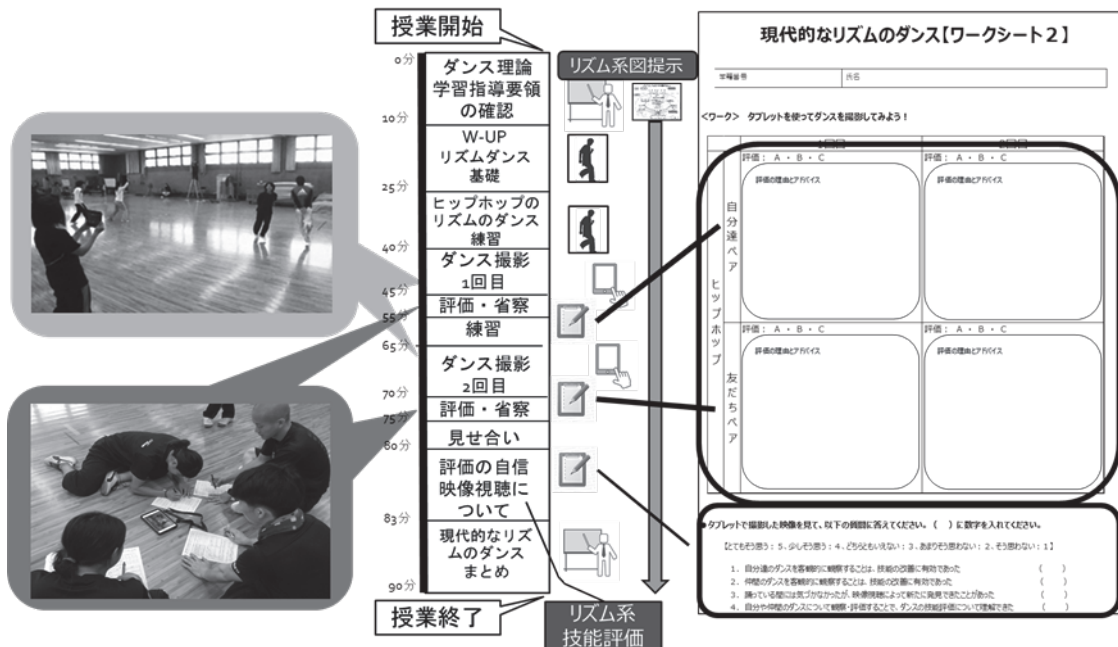


図2 5時間目の授業の流れ及びワークシート

2-3 ダンス実技におけるリズム系ダンスの「技能評価観点構造図」の説明・活用方法

ダンス実技で用いたリズム系ダンスの「技能評価観点構造図」は、カラー版のものであった（図3）。

3時間目の「現代的なリズムのダンス」の授業時に、リズム系ダンスの「技能評価観点構造図」を用いて、リズム系ダンスの技能評価観点の全体構造について以下の点を説明した。

- ① リズム系ダンスの核となる技能評価の観点は「リズムの特徴をとらえた動き」である
- ② ロック、サンバ、ヒップホップのリズムとその動き方の特徴

③ 「リズムの特徴をとらえた動き」が「どのように」実施されているかを評価する観点として、まずリズム系ダンスの基本的な動きである「動き続ける」「なりきり」「全身を極限まで動かす」の3観点がある

④ 「リズムの特徴をとらえた動き」に「リズムに乗る・リズムを崩す」「力の変化」の観点を加えることで、「メリハリ」ある動きとなる

⑤ さらに「立体的な動き」にするために、「身体的変化」「空間の変化」「人との関わり」という観点が存在する

⑥ 各観点の詳細な観点が白抜きのものであり、これ

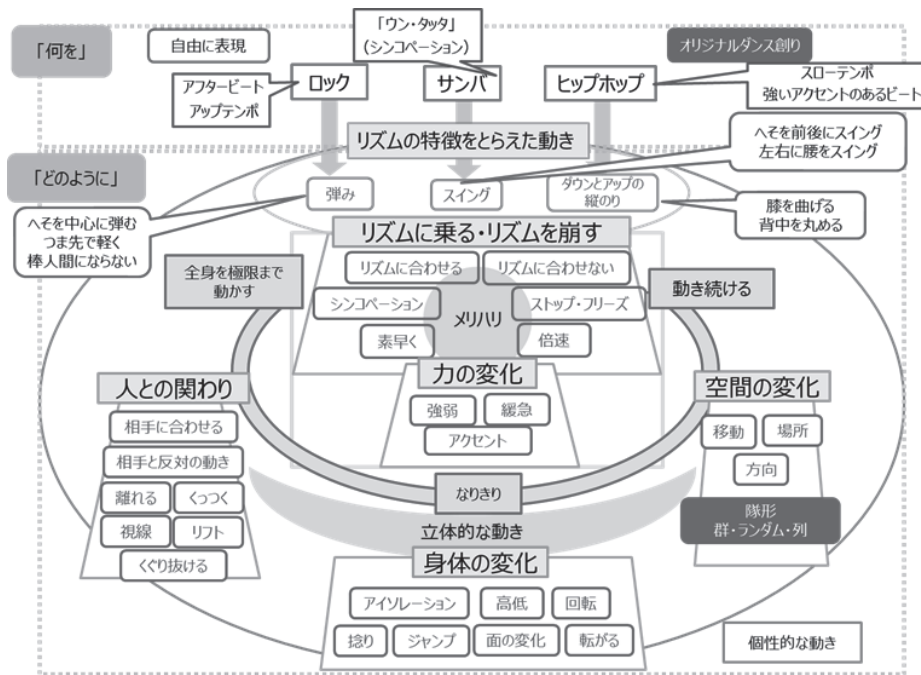


図3 ダンス実技授業で用いたリズム系ダンスの技能評価観点構造図

※ 授業では、カラー版を示した

らの観点は授業のねらいや内容によって取捨選択されるものである

- ⑦ 「個性的な動き」という観点は、「リズムの特徴をとらえた動き」が実現されているときに現れる

以上、「技能評価観点構造図」の説明を行った上で、3時間目は、「ロックのリズムのダンス」の動き方の特徴である「弾み」に特化して授業を展開した。

4時間目は、3時間目で学んだ「ロックのリズムのダンス」の「弾み」の動きについて、リズムに乗ってペアで「自由に表現」する活動を行った。その活動の際には、「技能評価観点構造図」を用いて、基本の動きの3観点と、「メリハリ」に関連する2観点及び「立体的な動き」に関連する3観点を意識することを伝えた。授業の中盤からは、ペアで「自由に表現」したダンスをタブレットで撮影し合い、撮影後、映像を視聴しながら技能評価を行った。タブレットの撮影及び視聴・評価活動は2回行った。技能評価の際には、各自に配布した「技能評価観点構造図」の技能評価観点を活用して、教員になった想定で、具体的に「評価の理由」とダンスをより良くするための「アドバイス」を記述するよう求めた。

5時間目は、「ヒップホップのリズムのダンス」の「縦のり」の動きを学ばせた後、リズムに乗ってペアで「自由に表現」する活動を行った。4時間目と同じく、「技能評価観点構造図」を用いて、各観点を意識

するように伝え、タブレットで撮影した映像について技能評価を行う際も、「技能評価観点構造図」の技能評価観点を活用するよう指示をした。

2-4. リズム系ダンスの技能評価力の評価方法ービデオ映像の視聴によるダンスの技能評価力の調査と分析ー

リズム系ダンスの「ロックのリズムのダンス」と「ヒップホップのリズムのダンス」の2種類について、学生に映像を鑑賞させ、それぞれの映像における動きについて技能を評価（A・B・C；Visual Analogue Scale：VAS法）させた。また、その「評価の理由」ならびに指導者の視点から「ダンスを良くするためのアドバイス」を記述式で回答させた。調査時は、「技能評価観点構造図」は提示せず、記述欄には、出来る限り多く記載するよう指示した。調査に用いた用紙の例を図4に示す。

調査に用いた映像は、いずれもダンスを専門としない体育系大学の学生がペアで活動している①「ロックのリズムのダンス」の映像3例、②「ヒップホップのリズムのダンス」の映像3例とした⁴⁾。

学校体育における実際の授業では、対象となる校種や学年に対応した学習指導要領に基づいた評価規準によって「技能」の評価が行われる。本研究では、映像内の評価対象となるのが大学生であるが、大学生が中

ロックのリズムのダンス 技能評価学習シート（事前）

学籍番号 _____ 氏名 _____

○それぞれの映像のダンスについて技能評価を実施し、当てはまるところに（し）を入れてください。
 また、その理由（評価の観点）について箇条書き（いくつでも）で答えてください。
 さらに、映像のダンスを良くするためにアドバイスをする点について箇条書き（いくつでも）で答えてください。

<例>

十分満足 ———— A ———— B ———— C ———— 努力を要する

↓

↓の位置は、「十分満足」と強く感じるほどより左側に、逆に「努力を要する」と感じるほどより右側になります。

【映像①】

評価 十分満足 ———— A ———— B ———— C ———— 努力を要する

評価の理由 _____

ダンスを良くするためのアドバイス _____

【映像②】

評価 十分満足 ———— A ———— B ———— C ———— 努力を要する

評価の理由 _____

ダンスを良くするためのアドバイス _____

【映像③】

評価 十分満足 ———— A ———— B ———— C ———— 努力を要する

評価の理由 _____

ダンスを良くするためのアドバイス _____

図4 技能評価調査に用いた用紙の一例（ロックのリズムのダンス）

学校第1学年及び第2学年の学習指導要領の例示⁵⁾をもとに展開した授業内で形成的授業評価（最終の総括評価ではない）としての技能評価（A：十分満足，B：おおむね満足，C：努力を要する）を実施している状況を仮定して行った。

中学校第1学年及び第2学年の学習指導要領の例示をもとに評価規準を設定し、筆者が各映像を評価した場合、「ロックのリズムのダンス」については、映像1：A評価，映像2：B評価，映像3：B評価，「ヒップホップのリズムのダンス」は、映像1：A評価，映像2：B評価，映像3：B評価であった。

調査は、「現代的なリズムのダンス」の学習前後（3時間目のはじめと5時間目の終わり）に行った。

分析項目は、「VASによる技能評価値」，「評価の理由」と「ダンスを良くするためのアドバイス」の記述とした。VASは一般的に10cmの線分を用い、質問項目による主観的な程度を直線上に印を付けることによって評定する手法で、数量的に評定しにくい項目でも容易に評定できるという特徴を持つ（山下，2015）。このVASによる評価は、田中ほか（2012）が、さまざまな競技の審判と競技者を対象に、打突の出来栄についてVASを用いて評価し、主観的な動きの評価を

数値化する際のVAS法の有効性を報告した。本研究においても、田中ほか（2012）の事例を参考に、各映像の動きについての出来栄をVAS法にて評価し、線分に矢印で示された値を「技能評価値」（十分満足：「0」～努力を要する：「10」）として、授業前後の値について、箱ひげ図を作成した。箱ひげ図では、ひげの両端を最小値と最大値、箱の両端を第1四分位と第3四分位、箱の中の線を中央値とした。また、箱ひげ図の中に平均値及び筆者の評価値も示した。授業前後の「技能評価値」の変化は、対応のあるt検定を用い、効果量Cohen's *d*を算出した。全ての統計解析は、SPSS Statistics Ver. 25を用い、統計的有意水準は5%とした。効果量の評価は、*d* = 0.8（効果量大）、*d* = 0.5（効果量中）、*d* = 0.2（効果量小）とした（水本・竹内，2011）。

「評価の理由」と「ダンスを良くするためのアドバイス」の記述について、EXCELシートに打ち込み、テキスト化した後、テキスト型データの計量的内容分析ソフトであるKH Coder 2（樋口，2004）を用いて、記述の用語数について分析を実施した。山崎ほか（2014）は、指導言語を分析した研究の中で、熟練指導者は未熟練指導と比較して、より多くの観点をもって動きを指導していたことを報告している。このことから、技能評価をする際には、より多くの技能評価観点から評価を行えることが、「技能評価力」の評価指標のひとつとなると考え、授業前後の「ロックのリズムのダンス」「ヒップホップのリズムのダンス」別に、それぞれの3映像に対して、全受講生の記述における記述抽出語数、抽出語の種類数を算出した。さらに、「技能評価観点構造図」の技能評価観点に関連する用語について、技能評価観点別に記述数をカウントした。

そして、授業前後の記述抽出語数、抽出語の種類数、「技能評価観点構造図」の技能評価観点数を比較して、受講生の技能評価力の変化をみた。さらに、授業前後の記述抽出語数と、「技能評価観点構造図」の技能評価観点数の変化については、1人あたりの数を算出して、対応のあるt検定を用い、効果量Cohen's *d*を算出した。全ての統計解析は、SPSS Statistics Ver.25を用い、統計的有意水準は5%とした。なお、効果量の評価は、「技能評価値」の分析と同様に、*d* = 0.8（効果量大）、*d* = 0.5（効果量中）、*d* = 0.2（効果量小）とした（水本・竹内，2011）。

なお、本研究は、鹿屋体育大学倫理委員会小委員会による承認を受けて実施した。学生には、結果のみを

論文や報告書等で公表することがあることを前提に、口頭・書面にて調査研究・映像取扱いの了承を得られた学生に関して、調査結果を採用した。

2-5. メンバー・チェック

「技能評価観点構造図」の技能評価観点数のカウントについては、データの信頼性を高めるため、4名の分析者によりメンバー・チェックを行った。分析者は、前述の筆者とTAの大学院生、スポーツ運動学研究者（体育系大学でコーチ学・運動学研究に30年従事）、トレーニング科学研究者（体育系大学で運動生理学・バイオメカニクス研究に33年従事）であった。テキスト化した記述回答を、筆者と大学院生の2名で議論を行い、内容について完全に一致するよう整理・集約を行った。その後、得られた結果について、先に挙げたスポーツ運動学研究者及びトレーニング科学研究者に客観的な意見を求め、再度検討した。

3. 結果

3-1. ビデオ映像の視聴によるダンスの技能評価力の変化

3-1.1 授業前後の技能評価値の変化

授業前後のVAS法による技能評価値の推移について、箱ひげ図を図5に示す。

ダンス実技の授業における各ダンスの変化傾向を見ると、以下のような特徴を見いだせる。「ロックのリズムのダンス」は、映像1・2について授業後に高く評価する傾向が認められた ($p < 0.01$, $d > 0.50$)。値の範囲については、授業前後でほとんど変化がなかった。順位性は、映像1と映像3について、授業前にはどちらの映像の評価もB評価に値する範囲に多くが分布し、平均値・中央値共に映像3の評価が上回って

いたが、授業後には、映像1について多くの学生がA評価と評価し、平均値・中央値共に、映像3の評価より上回り、筆者の技能評価値の順位性と一致が認められた。「ヒップホップのリズムのダンス」については、技能評価値の平均値や中央値には大きな変化は認められず、値の範囲もほとんど変化がなかった。また、筆者の技能評価値の順位性と授業前後共に一致が認められた。

3-1.2 授業前後の記述抽出語数及び抽出語の種類数の変化

各授業前後の記述抽出語数及び抽出語の種類数についての分析の結果を図6に示す。ダンス実技の授業では、「ロックのリズムのダンス」において、「技能評価観点構造図」を活用した授業後に、「評価の理由」の記述抽出語数が96%増加し、抽出語の種類数も29%増加した。「ダンスを良くするためのアドバイス」の記述抽出語数及び抽出語の種類数もそれぞれ105%、44%増加した。「ヒップホップのリズムのダンス」においても同様に、「評価の理由」及び「ダンスを良くするためのアドバイス」についての記述抽出語数が116%、137%増加し、抽出語の種類数についてもそれぞれ39%、71%増加した。

また、1人あたりの授業前後の記述抽出語数は、ダンス実技(図7)において、授業後、有意に増加した ($p < 0.001$, $d > 0.80$)。

3-1-3 授業前後の記述における「技能評価観点構造図」に示された技能評価観点及び各観点の記述数

(1) ロックのリズムのダンス

「ロックのリズムのダンス」においては、授業前は技能評価観点以外の評価に関する記述が「評価の理由」で50語、「ダンスを良くするためのアドバイス」

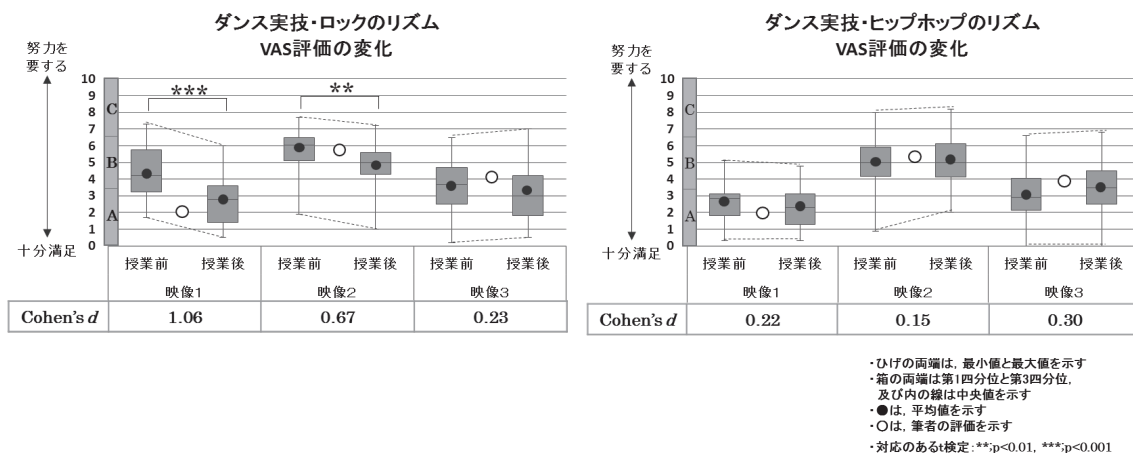


図5 ダンス実技の授業前後のVASによる技能評価値の変化

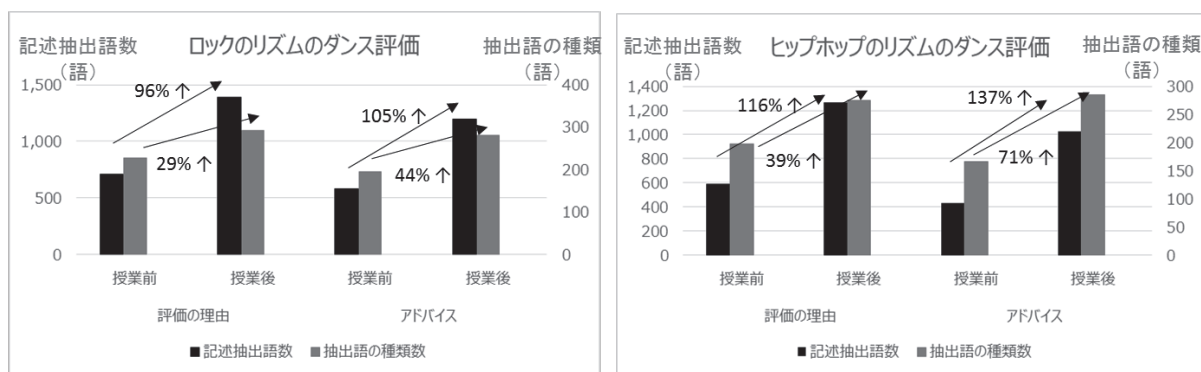
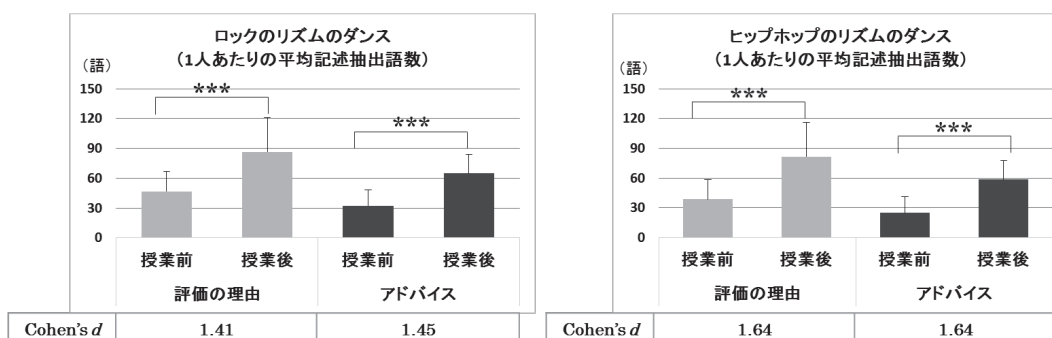


図6 ダンス実技の授業前後のダンス種別記述抽出語数、抽出語の種類数の変化



対応のあるt検定:
***:p<0.001

図7 ダンス実技の授業前後のダンス種別1人あたりの記述抽出語数の変化

で27語と共に多かった。しかし、授業後は、技能評価観点以外の評価に関する記述が「評価の理由」で11語、「ダンスを良くするためのアドバイス」で4語と減少した。

技能評価観点に関する記述(図8)は、授業前は、全45の技能評価観点中、「評価の理由」で14観点、「ダンスを良くするためのアドバイス」で17観点から記述がみられた。また「評価の理由」「ダンスを良くするためのアドバイス」共に、「相手に合わせる」の技能評価観点に関する記述が最も多く、「全身を極限まで動かす」や「なりきり」といった基礎的な動きや、「メリハリ」に関わる「リズムに乗る・崩す」「リズムに合わせる」等の記述が多かった。しかしながら、「立体的な動き」に関する記述は少なかった。授業後には、技能評価観点の項目数が、全45の技能評価観点中、「評価の理由」「ダンスを良くするためのアドバイス」共に35観点に増加した。また、「ロックのリズムのダンス」の核となる「リズムの特徴をとらえた動き」である「弾み」に関する記述が「評価の理由」で42語、「ダンスを良くするためのアドバイス」で11語と増加し、「メリハリ」に関連する「リズムに乗る・崩す」及び「力の変化」に関する項目数が増加していた。また、

授業前にはほとんど記述のなかった、「立体的な動き」に関連する「身体の変化」「空間の変化」「人との関わり」に関する記述も増加した。

(2) ヒップホップのリズムのダンス

「ヒップホップのリズムのダンス」においては、授業前は技能評価観点以外の評価に関する記述が「評価の理由」で18語、「ダンスを良くするためのアドバイス」で9語と共に多かった。しかし、授業後は、技能評価観点以外の評価に関する記述が「評価の理由」で5語、「ダンスを良くするためのアドバイス」で3語と減少した。

技能評価観点に関する記述(図9)は、授業前は、全45の技能評価観点中、「評価の理由」で15観点、「ダンスを良くするためのアドバイス」で16観点から記述がみられた。また「評価の理由」「ダンスを良くするためのアドバイス」共に、「全身を極限まで動かす」や「相手に合わせる」の記述が多く、リズム系ダンスの基本的な動きや「メリハリ」に関わる「リズムに乗る・崩す」等の項目の記述が認められた。しかし、「立体的な動き」に関する記述は少なかった。授業後には、技能評価観点の項目数が、全45の技能評価観点中、「評

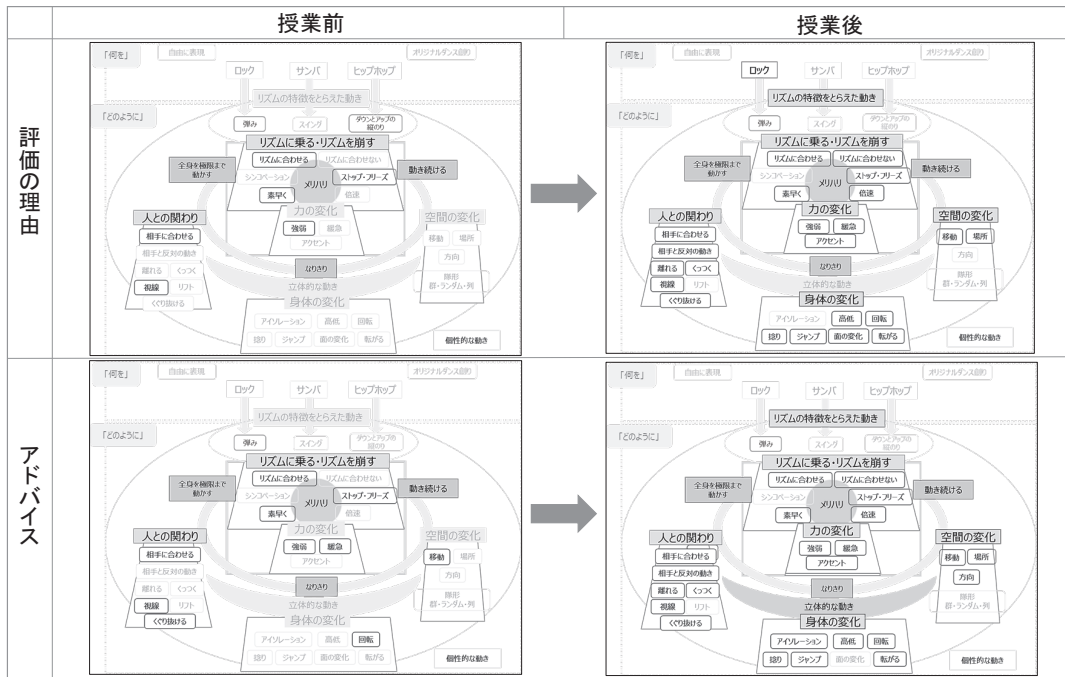


図8 ダンス実技における授業前後の記述に示された「技能評価観点構造図」の技能評価観点（ロックのリズムのダンス）
注）構造図上で記述されなかった観点等は透明化している

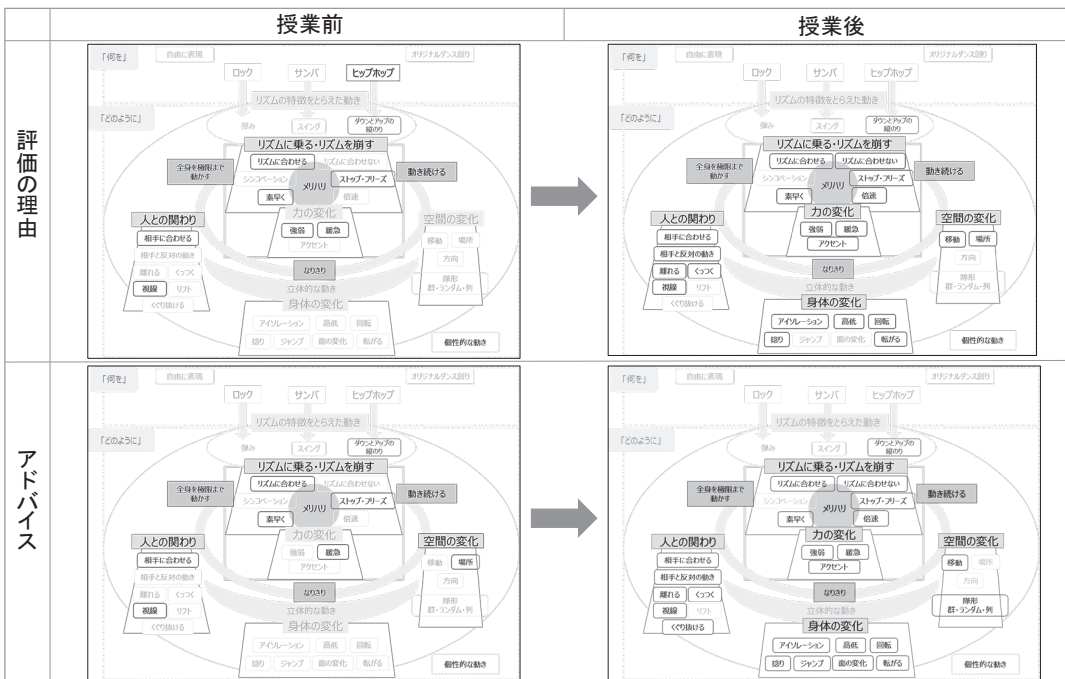


図9 ダンス実技における授業前後の記述に示された「技能評価観点構造図」の技能評価観点（ヒップホップのリズムのダンス）
注）構造図上で記述されなかった観点等は透明化している

評価の理由」が31観点、「ダンスを良くするためのアドバイス」が34観点に増加した。また、「ヒップホップのリズムのダンス」の核となる「リズムの特徴をとらえた動き」である「ダウンとアップの縦のり」に関する記述が「評価の理由」で44語、「ダンスを良くする

ためのアドバイス」で17語と増加し、「メリハリ」に関連する「リズムに乗る・崩す」や「ストップ・フリーズ」、「倍速」に関する項目や、「力の変化」に関する項目数が増加していた。また、授業前にはほとんど記述のなかった、「立体的な動き」に関連する「身

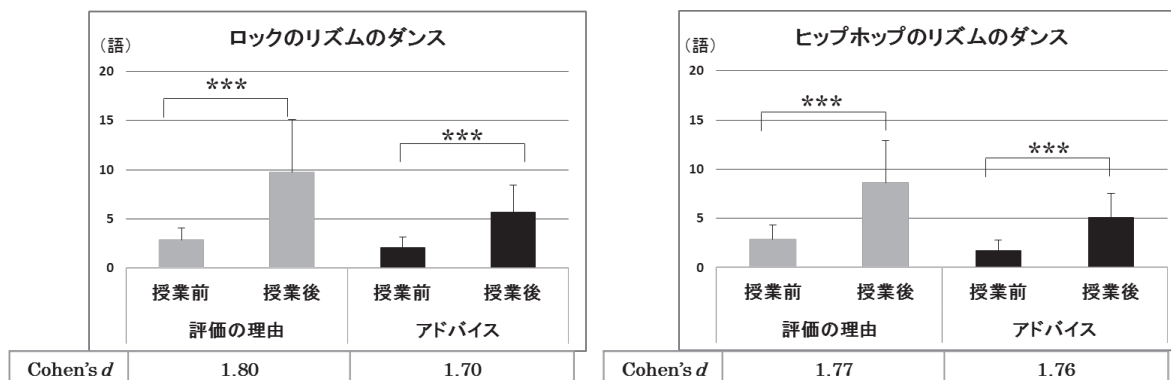


図10 ダンス実技における授業前後の記述に示された「技能評価観点構造図」の技能評価観点数の変化

体の変化」「空間の変化」「人との関わり」に関する記述が増加した。

(3) 1人あたりの授業前後の技能評価観点数の変化

1人あたりの授業前後の技能評価観点数は、授業後に全てのダンスにおいて、有意に増加した(図10) ($p < 0.001$, $d > 0.50$)。

4. 考察

本研究では、体育系大学のダンス実技の授業においてリズム系ダンスの「技能評価観点構造図」を手がかりとした技能評価力を高める授業を筆者が実践し、その効果について明らかにすることを目的とした。

本研究で対象とした「ダンス実技」を履修した学生は、ダンスを専門としないものの、比較的学習意欲が高く、教員免許取得希望者が多く選択をした授業であった。また、授業で用いた「技能評価観点構造図」は、筆者が作成したものであり、「技能評価観点構造図」の活用方法を熟知していた。従って、本研究は、受講生の向上心と、授業者の「技能評価観点構造図」の理解や活用方法の影響を受けた限定的な成果である可能性が考えられる。そのため、他大学や他学部、他学年の学生を対象とした授業や、筆者以外が授業を行った場合には、結果が異なる可能性があるが、本研究の考察においては、対象とした体育系大学の授業の成果に限定して行った。

4.1 ダンス実技の授業における「技能評価観点構造図」活用が技能評価力に及ぼす影響

4.1-1 授業前後の技能評価値の変化

本研究において、ダンス実技の授業前後の受講生によるVAS法による技能評価値(図4)は、「ロックのリズムのダンス」の映像1と映像3において授業前後

で順位が逆転した以外は、3つの映像の順位性に大きな変化が認められず、授業後の技能評価値については、筆者の順位性と一致した。このことは、インストラクターである熟練者とダンス歴が1年に満たない初心者のLockingダンス映像をダンス経験者とダンス非経験者に評価させたところ、ダンス経験の有無に関わらず、熟練者のダンスの評価は高く、初心者の評価は低かったとする報告(宮本・阪田, 2009)と一致する。従って、リズム系ダンスの「良い動き」の判断は、ある程度は、授業前の学習前段階でも行える可能性がある。この理由として、大学生がもつダンスのイメージはメディア等を通して見た「リズム系のダンス」である可能性が高いとの報告(朴ほか, 2017)からも、近年のダンスブームを反映し、メディア等を通してリズム系ダンスに触れる機会が多いこと(村田・松本, 2004)が関連していると考えられる。

4.1-2 授業前後の記述における記述抽出語数及び抽出語の種類数・「技能評価観点構造図」に示された技能評価観点数の変化

「ロックのリズムのダンス」「ヒップホップのリズムのダンス」共に、授業後に、映像視聴による技能評価の記述抽出語数及び抽出語の種類数(図5・6)が増加し、「技能評価観点構造図」に示された技能評価観点数も増加した(図9)。ベテランの指導者と大学院生が同じ作品を評価した記述を比較した宮本(2005)の研究によると、ベテラン指導者の方が記述内容が多く、多岐にわたる規準で評価をしていたと報告されており、本研究の結果はそれと一致する。また、筆者らは、ICTを活用したダンスの映像視聴・評価活動を取り入れたダンス実技の授業において、運動技能の改善や技能評価の理解に有効であることを報告している(梶ほか, 2018)。本研究対象のダンス実技の授業にお

いても、学生自らが踊るダンス実技に加えて、タブレット端末を活用したダンスの映像視聴・評価活動を現代的なリズムのダンスで計2回行った。授業前には「評価の理由」や「ダンスを良くするためのアドバイス」を記述しようにも知識が不足し、記述する用語が限られていた学生が、授業を通してダンスの技能評価に関する知識を獲得し、授業後には記述数や記述する用語の種類、技能評価観点が増加した可能性がある。

また、学生1人あたりの技能評価観点数については、「評価の理由」「ダンスを良くするためのアドバイス」の技能評価観点数が、全てのダンスで授業後に有意に増加していた。小学校教員の走り幅跳びの観察評価を行った那花ほか(2016)の研究では、観察評価の観点を共通のDVD教材を用いて学習したことで、体育を専門としない小学校教員も運動を観察的に評価することが可能となり、また教員自身の質的評価に対する意識の向上が認められたとしている。さらに同報告によると、動きのポイントとなる部分的な観点を知り、観察的に評価できることは、子どもの動きの修正点の把握や、適切な助言に有意義であると述べられている。授業では、ダンス技能の説明や、映像視聴・評価活動の際に、「技能評価観点構造図」の技能評価観点を繰り返し明示し、自分たちや仲間の動きを客観的に観察する際の指標として常に意識させたことで、受講生の動きを観察する技能評価観点が明確になり、より多くの技能評価観点から評価を行うことができるようになった可能性がある。つまり、リズム系ダンスの「技能評価観点構造図」は当該ダンスの技能評価の幅広い理解や実践に寄与していると考えられる。

4.1-3 授業前後の記述における「技能評価観点構造図」に示された技能評価観点の変化

(1) ロックのリズムのダンス

本研究において、授業前の調査時には、まだダンスの技能についての知識を学生に全く教授していない状況であった。その時点では、ダンス実技、ダンス実技対照群共に、技能評価観点以外の「楽しそう」「笑顔で踊っている」等の「表情」に関する記述が多く見られた。このような「表情」に関しては、リズムに乗り、音と身体が一体になったような感覚を心地よく感じた結果として、表現者が「笑顔」で踊っている可能性が高く、「リズムに乗って全身で踊る」姿そのものを捉えている可能性は否めないが、「技能」の評価観点としては不適切である。また、「振りを覚えていない」等の非定形のダンスの特性(三浦, 1984)とは異なる

観点から評価している様子も伺えた。学校体育におけるリズム系ダンスは、「自由に踊る創造的な学習」である(文部科学省, 2013)。しかし、ダンス領域の必修化を境に、教員がストリートダンス系のダンススタジオに通って既存のステップや振付を習得したりしてとした報道や、教員がヒップホップダンスのステップをインターネットで調べて教えたりするCM等が見られ、学校体育におけるリズム系ダンスについて誤解したイメージを持たれている可能性が指摘されている(赤堀・細川, 2018)。実際に、全国の中学校体育教員を対象とした実態調査においても、リズム系ダンスの授業において、予め振付されたダンスの実施率が高いことが明らかになっている(高橋, 2016)。以上のような背景から、学生が本来の学校体育のリズム系ダンスの目的とは異なる解釈をしている可能性が高いことを踏まえ、大学の授業では、学校体育におけるリズム系ダンスの「非定形」の特性をしっかりと教授する必要がある。授業後には、「評価の理由」「ダンスを良くするためのアドバイス」における技能評価観点以外の項目数が減少したことから、本研究で扱った授業でも一定の成果は得られたと考えられる。

技能評価観点に関しては、ダンス実技の授業前は、ペアの動きを「相手に合わせる」という動きの一致度や「リズムに乗る・崩す」「リズムに合わせる」というリズムと動きの一致度に関する評価、「全身を極限まで動かす」と動きの大きさに関する評価等、比較的、視覚的に捉えやすい技能評価観点の記述が多かった。一方、「立体的な動き」に関する「空間の変化」や「身体の変化」の記述は少なかった。授業後は、ダンス実技においては、「ロックのリズムのダンス」の「リズムの特徴を捉えた動き」の根幹である「弾み」に関する記述が多く出現し、「メリハリ」に関連する「リズムに乗る・崩す」「力の変化」の詳細な観点が増加した。さらに、授業前にはほとんど記述のなかった「立体的な動き」に関わる「身体の変化」や「空間の変化」の視点が新たに加わり、より多くの技能評価観点から評価を行えていることが明らかとなった。

以上の結果から、ダンスを専門としない学生にとって、「ロックのリズムのダンス」については、動きの一致やリズムと動きの一致、動きの大きさに関する技能評価観点については比較的捉えやすい観点であることが示唆される。しかしながら、動きの一致やリズムと動きの一致に関わる観点については、それらのみを重視してしまうと、「振付をそろえて踊る」「リズムに合わせなければいけない」といった、リズム系ダンス

本来の「リズムの特徴を捉えて自由に踊る」学習目標とは異なる視点を助長しかねない。授業での学習を経て、授業後に「ロックのリズムのダンス」の特性である「弾み」に関する記述が増加し、幅広い技能評価観点からバランスよく評価できるようになったことは、リズム系ダンスの特性を正しく理解している可能性が高い。また、「立体的な動き」に関わる技能評価観点のうち、特に「空間の変化」や「身体の変化」は、授業前段階では、把握しにくい観点であることも明らかになった。ダンス実技の授業後には、「空間の変化」や「身体の変化」に関する記述が増加したことから、これらの技能評価観点に関しては、「技能評価観点構造図」の明示が有効的に寄与した可能性がある。

(2) ヒップホップのリズムのダンス

「ヒップホップのリズムのダンス」も「ロックのリズムのダンス」と同様に、授業前の時点では、技能評価観点以外の「表情」や「振付の間違い」等に関する記述が見られ、授業後には減少した。以上の結果から、「表情」や「振付の間違い」については、リズム系ダンスに共通した、「技能評価観点」ではないが「技能評価観点」として捉えてしまいがちな項目であることが明らかとなった。大学の授業において、学校体育におけるリズム系ダンスの特性を指導する際の、重要項目であることが示唆される。

技能評価観点に関しては、ダンス実技の授業前は、「全身を極限まで動かす」「相手に合わせる」、「メリハリ」に関わる「リズムに乗る・崩す」等をはじめとして、目で捉えやすい技能評価観点の記述が多く、「立体的な動き」に関する記述はほとんど見られなかった。しかし、授業後には、「ヒップホップのリズムのダンス」における「リズムの特徴を捉えた動き」の根幹である「ダウンとアップの縦のり」に関する記述が最も多く出現し、「立体的な動き」に関わる技能評価観点も増加し、多くの技能評価観点から動きを捉えている様子が明らかになった。これらの傾向は、「ロックのリズムのダンス」とほぼ一致したことから、異なるリズムの種類であっても、リズム系ダンスの技能評価観点の学習過程には共通性があることが示唆される。ダンス実技の授業では、先述したとおり、「ロックのリズムのダンス」、「ヒップホップのリズムのダンス」共に、図3のカラー版の「技能評価観点構造図」を用いたが、説明する際には、①「リズムの特徴を捉えた動き」：「弾み」「縦のり」→②「リズム系ダンスの基本的な動き」：「全身を極限まで使う」「動き続け

る」「なりきり」→③「メリハリ」：「リズムに乗る・崩す」「力の変化」→④「立体的に動く」：「身体の変化」「空間の変化」「人との関わり」の順で説明を行った。ダンス実技の授業後の記述においておおよそこの順に用語数が分布していたことから、授業前には視覚的に捉えやすい技能評価観点のみからしか評価できなかった学生が、授業を通して「技能評価観点構造図」の構造に従って、理解を深めた可能性が示唆される。つまり、「技能評価観点構造図」を用いて視覚的に技能評価の構造を捉えることが、多様な観点からの動きの評価には有効であると考えられる。

5. まとめ

本研究は、体育系大学のダンス実技授業において、「技能評価観点構造図」を手がかりとしたリズム系ダンスの技能評価力を高める授業を筆者が実施し、その効果について明らかにすることを目的とした。そのために、体育系大学の2017年度前期に開講されたダンス実技の受講生47名を対象に、リズム系ダンスの技能評価の実践力を確認するため、受講生全員が同一のダンスのビデオ映像を鑑賞し、技能評価を行う調査を実施した。さらに受講生個人がどのようにダンスの技能評価ができるようになったと感じているかについても調査を実施した。

その結果、リズム系ダンスでは、「技能評価観点構造図」を活用したダンス実技の授業後に、筆者の技能評価値との一致度が高まり、記述抽出語数・抽出語の種類数が増加した。また、授業後に「技能評価観点構造図」に示された技能評価観点数も増加していた。

以上の結果より、「技能評価観点構造図」に示された技能評価観点を教示することで、受講生の動きを観察する技能評価観点が明確になり、より多くの観点から評価を行うことが可能となったと考えられ、「技能評価観点構造図」の活用は、リズム系ダンスの技能評価の理解や実践に寄与することが示唆された。

一方、リズム系ダンスでは「表情」や「振付の間違い」等については、技能評価観点ではないが、学生が技能として評価してしまう傾向が明らかとなった。これらの点については、授業内で明確に説明・指導を行うことが必要であると共に、「技能評価観点構造図」の加筆・修正に向けて、重要な点であると考えられた。

注

1) 日本教育大学協会(2004)は、教員に求められる資質能力の養成課程のカリキュラムの基軸を、「教

育実践を科学的・研究的に省察 (reflection) する力」と示し、教員養成全体で「実践的指導力」を養成する方向性を定めた。また、「教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について (答申)」(文部科学省, 2012) では、実践的指導力について、「新たな学びを展開できる実践的指導力 (基礎的・基本的な知識・技能の習得に加えて思考力・判断力・表現力等を育成するため、知識・技能を活用する学習活動や課題探究型の学習、協働的学び等をデザインできる指導力)」と定義された。

- 2) ダンス実技の授業の後半 (7時間目以降) は、表現系ダンスの「技能評価観点構造図」を用いて授業を実施したが、本論文では、論文の分量を考慮して、授業の前半で行ったリズム系ダンスの「技能評価観点構造図」を用いた授業の効果について報告する。
- 3) 本授業の受講生は、ダンスを専門種目としない学生であり、メディア等を通してダンサーが踊る姿を観る機会はあったとしても、学校体育授業の中で、一般の児童・生徒が踊る姿や作品に触れる機会は少ないと考えられた。そこで、1時間目の授業においては、各校種における「表現リズム遊び」「表現運動」「ダンス」の授業の中で創作された表現系ダンスやリズム系ダンスの作品を鑑賞し、児童・生徒の動きの実態を把握し、学校体育授業における「ダンス」を知る活動を行った。
- 4) それぞれのダンス映像の撮影状況と表現課題については以下の通りである。
 - ①リズム系ダンスの「ロックのリズムのダンス」の表現課題は、SCATMAN JOHN の曲「Everybody Jam !」(BPM 134) に乗せて、ペアでスキップや弾み、ストップ、回転、ジャンプ、リズムの変化等の簡単な動きを入れた動きを指導した後、ペアの中でリーダーを決め、指導された動きをもとに自由に動きを再構成し、曲に合わせて自由に踊るものであった。
 - ②リズム系ダンスの「ヒップホップのリズムのダンス」の表現課題は、「現代的なリズムのダンス～リズムに乗って踊る楽しさ～」の音楽 CD より「ストリートダンサー」(BPM 89) に乗せて、ペアで縦のりの動きを中心に、高低差や移動、回転、リズムの変化等の簡単な動きを入れた動きを指導した後、ペアの中でリーダーを決め、指導された動きをもとに自由に動きを再構成し、曲に合わせて自由に踊るものであった。
- 5) ロックのリズムのダンス：〈リズムと動きの例

示〉・自然な弾みやスイング等の動きで気持ちよく音楽のビートに乗れるようになり、簡単な繰り返しのリズムで踊ること。・軽快なリズムに乗って弾みながら、揺れる、回る、ステップを踏んで手をたたき、ストップを入れる等リズムをとらえて自由に踊ったり、相手の動きに合わせてたりずらしたり、手をつなぐ等相手と対応しながら踊ること。ヒップホップのリズムのダンス：〈リズムと動きの例示〉シンコペーションやアフタービート、休止や倍速等、リズムに変化を付けて踊ること。・短い動きを繰り返す、対立した動きを組み合わせる、ダイナミックなアクセントを加える等して、リズムに乗って続けて踊ること。

文献

- 赤堀文也・細川江利子, 学校体育における現代的なリズムのダンスとヒップホップダンスの関係性. 埼玉大学紀要 教育学部, 67(1) : 343-360, 2018.
- 樋口耕一, テキスト型データの計量的分析——2つのアプローチの峻別と統合——. 理論と方法 (数理社会学会), 19(1) : 101-115, 2004.
- 梶ちか子・小松恵理子, 現職教員のダンス授業実践に影響を及ぼす要因に関する検討——鹿児島県におけるダンス実技研修会のアンケートより——. 九州体育・スポーツ学研究, 30(1) : 35-41, 2015.
- 梶ちか子・松元隆秀・佐藤豊・金高宏文, 体育系大学のダンス授業における ICT 活用によるダンス映像視聴・評価活動の実践——大学3・4年生を対象とした授業の分析を通じて——. 大学体育学, 15 : 31-45, 2018.
- 梶ちか子・松元隆秀・金高宏文, 表現系ダンス・リズム系ダンスの「技能評価観点図」の提案. 九州体育・スポーツ学研究, 早期公開論文, 2019.
<http://webpages.ihs.kyushu-u.ac.jp/ktsm/>
- 木山慶子, 教員養成におけるダンスの授業改善——学生による授業評価とダンスを苦手とする学生の変容から——. 群馬大学教育学部紀要 芸術・技術・体育・生活科学編, 49 : 93-103, 2014.
- 松本奈緒・寺田潤, 男女必修化時代の中学校ダンス実施の現状と指導者の問題意識——秋田県中学校保健体育教諭の研修レポートを参考として——. 秋田大学教育文化学部研究紀要 教育科学部門, 68 : 25-34, 2013.
- 松本富子・高橋和子・茅野理子・細川江利子・佐分利育代・廣兼志保・畑野裕子, 現職教員のダンス指導

- 実践に影響を及ぼす要因の検討——大学時履修経験が与える影響について——. 舞踊学研究, 16 : 12-23, 1994.
- 三浦弓杖, 舞踊教師は体育教師か. 体育の科学, 34 : 37, 1984.
- 宮本圭太・阪田真己子, Locking ダンスにおける質評価指標の定量化. 情報処理学会研究報告, 2009_CH_82(4) : 1-8, 2009.
- 宮本乙女, 創作ダンスの学習における学習者によるパフォーマンス評価の研究. お茶の水女子大学附属中学校研究紀要, 34 : 65-86, 2005.
- 宮本乙女・中村恭子, 体育系大学における中学校ダンス必修化に対応したダンス指導法授業の検討：ダンス指導法授業を受講した学生の意識の変容を通して——. 日本女子体育大学紀要, 45 : 141-153, 2015.
- 宮本乙女, 小グループで指導法を学び合う活動を取り入れた「ダンス指導法授業」の成果. 日本女子体育大学紀要, 48 : 111-122, 2018.
- 水本篤・竹内理, 効果量と検定力分析入門——統計的検定を正しく使うために——. 2010年度部会報告論集「より良い外国語教育研究のための方法」, 47-73, 2011.
- 文部科学省, 中学校学習指導要領解説 保健体育編. 東山書房：京都, 2008.
- 文部科学省, 教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について. 中央教育審議会答申, 2012.
http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2012/08/30/1325094_1.pdf 参考日：2019-11-01.
- 文部科学省, 第1節「表現運動系及びダンス」領域のねらいと内容. 学校体育実技指導資料 第9集 表現運動系及びダンス指導の手引き, 2013, p.2-9.
- 文部科学省, 教員をめざそう. 2015.
http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/miryoku/_icsFiles/afieldfile/2009/09/03/1283833.pdf 参考日：2018-09-04.
- 文部省, 中学校学習指導要領. 大蔵省印刷局：東京, 1989a.
- 文部省, 高等学校学習指導要領解説 保健体育編. 東山書房：京都, 1989b.
- 文部省, 小学校学習指導要領解説 体育編. 東山書房：京都, 1999a.
- 文部省, 中学校学習指導要領解説 保健体育編. 東山書房：京都, 1999b.
- 文部省, 高等学校学習指導要領解説 保健体育編. 東山書房：京都, 1999c.
- 村田芳子・松本昌代, 生涯学習に向けた「リズムダンス」・「現代的なリズムのダンス」の学習指導に関する縦断的研究. (社) 日本女子体育連盟学術研究, 21 : 21-44, 2004.
- 那花和哲・尾崎大・加藤謙一, 小学校教員の運動観察力に関する研究——男子6年生の走り幅跳びを事例として——. 宇都宮大学教育学部教育実践紀要, 2 : 99-106, 2016.
- 中村恭子, 中学校体育の男女必修化に伴うダンス授業の変容——平成19年度, 20年度, 21年度及び24年度の年次推移から——. 日本女子体育連盟学術研究, 26 : 1-16, 2009.
- 日本教育大学協会, 教員養成の『モデル・コア・カリキュラム』の検討——『教員養成コア科目群』を基軸にしたカリキュラムづくりの提案——. 会報, 88 : 10, 2004.
- 太田早織教員養成課程におけるダンス授業の学習指導過程の検討——ダンスを「踊る・創る・指導する力」の育成を目指して——. 人文学研究所報, 57 : 101-121, 2017.
- 朴京眞・平山素子・寺山由美・岡子美和・米澤麻佑子, ダンスの授業を選択した大学生のもつダンスのイメージのテキストマイニング分析——大学体育におけるダンス授業のあり方の検討——. 大学体育研究, 39 : 29-44, 2017.
- 高橋和子, ダンス領域を実践する上での成果と課題の把握並びにその解決策のための方策. 平成27年度文部科学省委託事業 武道等指導重質・資質向上支援事業, 2016.
<http://kazuko-ynu.jp/pdf/report2015.pdf?r2> 閲覧日：2018年12月21日
- 田中彩子・吉本隆哉・山本正嘉, なぎなた競技における打突の評価を Visual analog scale (VAS) を用いて定量化する試み——審判と競技者間の判定の食い違いに着目して——. スポーツパフォーマンス研究, 4 : 105-116, 2012.
- 山下利之, 特集③人間工学のための計測手法：「第3部：心理計測と解析」(1)——質問紙による計測と解析——. 人間工学, 51(4) : 226-233, 2015.
- 山崎朱音・村田芳子・朴京眞, 創作ダンスの指導における指導言語の意味と動きをみる観点：教材「新聞紙を使った表現」を対象に. 体育学研究, 59 : 203-226, 2014.